

熱川温泉病院 星指 菜摘

- 功 績** 身体抑制の患者さんに最善のケアを検討・提供した結果、療養生活が安定。抑制解除につなげた功績。
- 推 薦 者** 石田 みな子 (5階病棟主任)
- 推 薦 理 由** 前院入院中より身体抑制をしていたパーキンソン病の患者さんに対し、薬剤調整や経口摂取などの工夫を施したことで生活リズムや精神状態が安定し、抑制解除につなげることができた。これは多職種連携による患者さんのためのケアの検討を積み重ねた結果であるが、とりわけ中心的役割を果たした被推薦者の功績が大きな要因であるため。

内 容

N・Hさん (70代 男性) は14年前よりパーキンソン病・痙攣発作にてO医療センターで治療中 (神経内科・精神科) であった。2018年8月、痙攣発作頻発あり同院入院。薬剤治療・薬剤調整を実施。低下した日常生活動作能力、認知機能に対し、リハビリテーション、胃瘻および膀胱瘻造設などの治療後、同年12月に当院へ紹介入院。リハビリテーションを行い、経口摂取再建、ADL改善を図っていたが、今年4月右眼痛、皮疹出現。さらに顔面水疱形成があり、皮膚科コンサルトのうえ、J病院に転院。髄液よりHZV - PCRが検出され、右三叉神経第2枝領域からのヘルペス性髄膜炎の診断で抗ウイルス剤での治療・軽快後、5月中旬当院再入院となった。しかし、再入院直後に容態が急変。心肺停止となり回復することなく、ご家族の到着を待ち死亡確認となった。

当院入院当初、N・Hさんは認知機能の低下による膀胱瘻・胃瘻カテーテルの抜去リスクがあり、幻覚・体動著明、奇声をあげることがあり、前院より行っていた体幹抑制を継続していた。そこで、担当看護師の星指が中心となり医師・看護師・リハビリ等多職種が連携。患者さんにとって最善のケアを繰り返し検討し、「安易に抑制に頼ってはならない」との思いから、計画が練られた。

まず薬剤調整と経口摂取を開始。しばらくすると幻覚や異常行動が減り、生活リズムが確立するようになった。また絵や文章を書くことが趣味であったので、ノートを用意し、家族に会いたい自分の気持ちを表現するようになり精神状態も安定した。その後、抑制を解除。

センサーマットを設置し転倒のリスクに対処するまでにこぎつけることができた。

残念ながらN・Hさんはお亡くなりになったが、先日ご家族より「熱川温泉病院に来て、話すことや食べることが出来る状態で最後の時を過ごせて本当に良かった。ありがとうございます」とのお礼の手紙を頂いた。多職種が連携して取り組んだが、特に被推薦者が患者さんやご家族の尊厳に真摯に向き合い、抑制に頼らない最善のケアを中心となって実践したことが大きな要因であった。